

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 八重樫 徹

本論文は、フッサールの倫理学を主題とし、生前に倫理学に関するまとまった著作を残さなかった彼の講義録や未公刊草稿に基づきつつ、価値および道德について彼がどのような立場をとり、どのような考察を展開していたのかを、丹念に再構成しつつ明らかにしようとした意欲的な労作である。論文は、フッサールの価値論を扱う第一部と、彼の道德哲学を扱う第二部から成る。

第一部第1章「価値経験の志向性」ではまず、初期フッサールの『論理学研究』における、非客観化作用としての価値評価作用の位置づけとその問題点が明らかにされる。

続く第2章「超越論的観念論と構成分析」では、中期フッサールがとるようになった超越論的観念論という立場と、その核心をなす「構成」概念の内実が明らかにされる。従来、超越論的観念論という構想が受けてきた様々な誤解を取り除きつつ、論者はフッサールの価値の構成分析も、それに基づく彼の倫理学も、超越論的観念論を背景に持つと論じる。

第3章「ブレンターノにおける情動と価値」では、フッサールの価値論に大きな影響を与えたブレンターノの価値論に着目し、その内実とそこに潜む問題点を明らかにするとともに、フッサールの価値論がその乗り越えの試みとして位置づけられる。

第4章「価値はいかにして構成されるのか」は、以上を踏まえてフッサールによる価値の構成分析の内実を解明している。公刊著作のみならず、未公刊草稿をも参照しつつ、「価値覚(Wertnehmung)」という彼独自の概念と価値の構成分析の内実が、できる限り整合的な仕方で解釈される。論者によれば、価値は客観性を持つが、価値覚とは感情にほかならず、価値の構成分析とは感情の正当性条件の解明である。以上が第一部である。

第二部第5章「道德的判断と絶対的当為」では、第一部の考察を踏まえ、中期以降のフッサールの道德哲学の内実が論じられる。論者によれば、フッサールは道德的当為を価値に還元し、行為者が選択可能な価値を比較衡量し、理性的に選び取る行為が道德的行為だとする合理主義的立場をとる。そして道德の根拠に生全体を実践的に反省しうる能力の主体として「真の自我」が見定められる。

第6章「運命、愛、信仰」では、自らの合理主義的倫理学に対して、生の不合理性・事実性という観点からなされたフッサール自身の自己批判の内実がテキストから浮き彫りにされるが、論者はこれに対して、個人のアイデンティティが道德的規範とそれを見定める実践的反省能力の根源であることを示して、合理主義的立場を擁護する形での今後の解釈の可能性を説く。以上が第二部であり、続く終章で本論文の全考察がまとめられる。

以上のように本論文は、フッサールの倫理学思想を、公刊著作のみならず未公刊草稿をも参照しつつ、再構成し、その内実とそこに潜む問題点、そして今後の解釈の可能性を示した意欲的な論考である。発生や間主観性といった関連する諸問題に関する考察が不十分であることなど、今後さらに論じられるべき点もいくつか見受けられるが、ドイツでの未公刊草稿閲覧をも踏まえた、先行研究がまだあまりない分野での本研究は、今後の展開の可能性も含め、全体として秀逸なものとして評価される。よって、本論文は博士(文学)の学位を授与するに値するとの見解で、審査委員全員が一致した。